総合教育センターだより

街路樹

発行第　１４８号
令和２年１２月２２日（火）
いわき市総合教育センター
いわき市平字堂根町１－４
０２４６（２２）３７０５

音楽科の授業改善の視点と実践例紹介

学習指導要領には、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める際の配慮事項が示されています。その視点の1つに、「主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか」があります。

これを基に授業を参観させていただくと、子どもが音楽に没頭して楽しく学ぶことのできる授業の背景には共通した教師の姿がありました。

1つ目は、教材教具の細やかな準備です。例えば、創作の授業では、掲示物やワークシートが丁寧に準備されていました。子どもは、それらで自分の考えを何度も確認しながら、リズムの組み合わせや使用する楽器を選択することができ、思考の支えとなっていました。また、教師が、「リズムの重ね方が素敵」「手拍子をいれた所がいいね」とその作品のよさを賞賛したことから、子どもは創作する楽しさと自分で創意工夫することができたという達成感を感じることができたと思います。

2つ目は、子どもの発言を大切にしていることです。鑑賞の授業において「～が聞こえた」「～みたい」といったつぶやきを受け止め、「本当にそうか、もう一度聴いてみよう」と聴くポイントを明確に示し、確かめる場をその都度設けていました。その結果、「あっ本当だ」「分かった」「面白い」との声があがり、自ら気づくことができたことへの喜びと音楽への感動がある授業となっていました。

この2つの共通点は、子どもがどのようなことにつまずきどのような発言をするか等、教師の「見通し」の上で準備された手立てや支援の成果であると思います。

この「見通し」を大切に、子どもが音楽活動を楽しみながら音楽に親しんでいく力を身につけていけるよう、小中学校で連携し、日々の授業を積み重ねていきましょう。

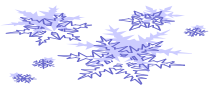
「個人褒め（こじんほめ）」のすすめ

支援に伺った全ての学校で共通して、話していることがあります。それは、**「個人褒め」**です。**「個人褒め」**は、子どもの名前と良いところを具体的に言う褒め方です。褒める場面によって２通りの方法があり、それぞれの効果が考えられます。

１つ目は生徒指導面についてです。すべての子どもたちが分かるように、名前と良いところを具体的にあげて褒める方法です。「〇〇さんは、背筋がピンと伸びていて、姿勢が良いですね。」と、他の子どもたちが注目するように褒めます。褒められた子どもは、その良い姿を持続しようと努めます。また、他の子どもたちにとっては、褒められた子どもの姿が良い手本となります。そして、褒められた子どもを手本として、姿勢を良くした子どもや良い姿勢になろうとしている子どもも褒めることで、さらに褒めることが増えていきます。「背筋を伸ばしなさい。」という指導は少なくなります。

２つ目は学習指導面についてです。授業中の机間指導の際に、子ども一人一人の取組みに対して、さりげなく褒める方法です。例えば、「〇〇さん、できてるね。」「〇〇さん、いい考えだね。」と、子ども本人だけが褒められたことが分かるように褒めます。褒められた子どもは自信を持ち、発表の時には自分から挙手し、大きな声で発表することにつながります。そして、発表後にまた褒めることができます。さらに、授業の終わりに、褒められた子どもは「〇〇ができるようになった。」「〇〇が分かった。」と振り返ることができ、達成感や満足感を感じることにもつながります。「大きな声で発表しなさい。」「何が分かったかを書きなさい。」という指導は少なくなります。

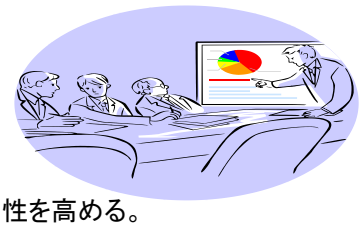
ぜひ、**「個人褒め」**を実践して、学級づくりと授業づくりに生かしてみてはいかがでしょうか。



カリキュラム・マネジメント教育講座

教育課程の編成の時期になりました。「カリキュラム・マネジメント講座」を今年度から新設講座として開催いたしました。郡山市立白岩小学校　校長　坂本義仁先生の講義の中で、「カリキュラム・マネジメントの基本的な方法」について、以下のように紹介がありました。

⑴　学校課題と教育目標を明らかにして共有化を図る。
⑵　評価を核としたマネジメントサイクルをつくる。
⑶　教育内容・方法上の「連関性」を確保する。
⑷　⑴⑶の手法として、指導計画等を「可視化」する。
⑸　学校内外の「協働体制」「協働的な組織文化」をつくる。
⑹　カリキュラムの計画・評価への参加促進により、関係者の当事者性を高める。



（大阪教育大学教授　田村知子先生の講義資料より）

特に印象に残ったことは、⑵の「評価・改善」について、「強み・成果を大切にする」ということです。評価を行うと、どうしても弱みに目がいきがちですが、「よいところを生かして課題を解決していくことが、教育活動の質の向上につながる」とのことでした。研修の参加者からは、「ただがんばるのではなく、目的をもってがんばっていきたい」「『学校全体』という視点をもち、運営に関わっていく姿勢をもたなければと痛感した研修であった」などの感想が聞かれました。各学校でも、カリキュラム・マネジメントの方法を生かし、次年度に向け、よりよい教育課程を編成していただけたらと思います。